

《エクス・リブリス》次回（第10回）配本は——
ポール・トーディ 小竹由美子訳

『ウィルバーフォース氏の ヴィンテージ・ワイン』

……イギリス

【2010年8月発売予定】

The Irresistible Inheritance of Wilberforce

■今後の刊行ラインナップ（書名はすべて仮題です）

オルガ・トカルチュク 小椋彩 訳
『昼の家、夜の家』……ポーランド

ペール・ベッテルソン 西田英恵 訳
『馬を盗みに』……ノルウェー

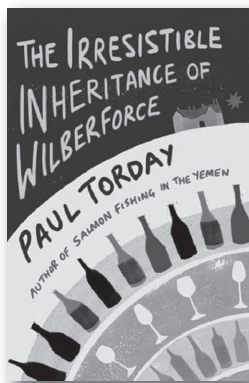
サーシャ・スタシニチ 浅井晶子 訳
『兵士はどうやってグラモフォンを修理するのか』
……ボスニア・ヘルツェゴビナ

オラフ・オラフソン 岩本正恵 訳
『ヴァレンタインズ』……アイスランド

ラウィ・ハージ 藤井光 訳
『デ・ニーロのゲーム』……レバノン

ミゲル・シジュコ 中野学而 訳
『イルストラード』……フィリピン

アルベルト・ルイ・サンチェス 斉藤文子 訳
『空気の名前』……メキシコ



ジョー・ブレイナード 小林久美子 訳
『ぼくは覚えている』……アメリカ

カルロス・バルマセダ 柳原孝敦 訳
『ブエノスアイレス食堂』……アルゼンチン

エドワード・P・ジョーンズ 小澤英実 訳
『地図にない世界』……アメリカ

コルム・トビーン 榎木伸明 訳
『ブルックリン』……アイルランド

オラシオ・カステジャーノス・モヤ 細野豊 訳
『無分別』……エルサルバドル

トーディの『イエメンで鮭釣りを』が映画化！

《エクス・リブリス》シリーズの第2弾としてみなさんにはもうおなじみのあの傑作コミックノベルが、映画化されます！ 監督は「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」「ギルバート・グレイブ」のラッセ・ハルストレム。「サイダーハウス・ルール」「 SHIPPING・ニュース」などでも、小説作品の映画化はお手の物ですね。

気になるキャスティングですが、ユアン・マクレガー、エミリー・ブラント、クリスティン・スコット・トーマスが出演する模様。なかなか役柄にぴったりなのではないでしょうか。映画が無事完成し、日本で公開してくれることを祈りましょう！



2010年6月 白水社/チーム《エクス・リブリス》作製

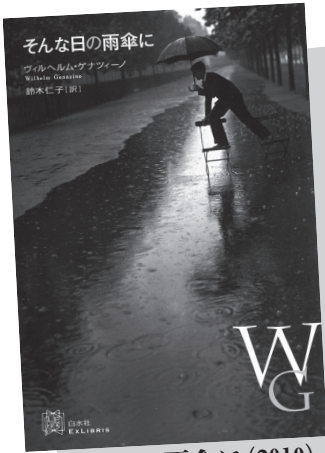
FREE!
Jun.2010

《エクス・リブリス》通信 Vol.9



© Annette Pohnert / Carl Hanser Verlag

『そんな日の雨傘に』
ヴィルヘルム・ゲナツィーノ



自分の人生に「存在許可」を出した憶えがない男。靴の試し履きの仕事で、今日も街を歩き回って、観察する……。

WG

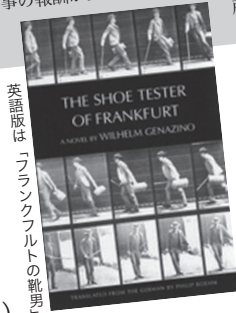
「社会のはずれ者は、綿ぼこりに生きるのだ。押しつけがましきや図々しきになによりも羞恥をおぼえるらしいそのまなざしは、滑稽で、皮肉で、ちょっと哀切で、そしてつねに距離を保っている。距離を持った眼で自分と世界とを観察しつづけることが、この人の生きる術である」
 (「訳者あとがき」より)

そんな日の雨傘に (2010)

「自分が許可してもらえないのにこの世にいる」という気分から逃れることができない中年男の主人公は、何をするでもなく、「人生の面妖さ」に思いをめぐらし、平凡で、日常的で、様々な路上の出来事に目を留める。地下道のホームレスの男たち、足元に置かれた他人のトランク、サーカスの娘と馬のペニス……。そのたびににとりつめられない想念が脳裏をよぎり、子ども時代の光景がなんとなく思い出され、なにげない言葉が心に引っかかる。遊歩の途中でつぎつぎと出会うのは、過去になんらかの関係を持った中年の女たち……。彼女の思い出がふつふつと浮かんでくる。主人公がなにかから気をそらすように歩き回るのは、同棲していた女が愛想を尽かして出て行ってしまったからだ。しかも靴を試し履きする仕事の報酬が減り、生活もままらなくなってきた。そうした挫折と失意が、居場所のない思いをいっそう深めてゆく……。



Ein Regenschirm für diesen Tag (2001)



The Shoe Tester of Frankfurt (2006)

キャッチーな英語版タイトルに対して、邦題は原書に忠実な「そんな日の雨傘に」となりました。ちなみにこの印象的なフレーズ、本作中ではただ一箇所しか登場しません。その決定的(?)な場面は 113頁に訪れますので、読み飛ばしてしまわないように。

ヴィルヘルム・ゲナツィーノ

Wilhelm Genazino

1943年、ドイツのマンハイム生まれ。ギムナジウム(中等高等学校)を中退し、17歳の頃からジャーナリズムにかかわる。30代になって高校卒業資格を得て、40代の前半にフランクフルト大学でドイツ文学、社会学、哲学を学ぶ。ラジオドラマの執筆、フリージャーナリストとして活躍しながら、数多くの小説を発表する。長い間、ごく一部の読者にしか知られていなかったが、本書がテレビの文学番組で絶賛されたのをきっかけに、一躍脚光を浴びる。2004年にドイツ最高の文学賞である《ビューヒナー賞》をはじめ、《フォンターネ賞》、《クライスト賞》などを受賞し、数多くの読者を獲得するようになる。本書が初めての邦訳。



・テレビの文学番組
 =「文学四重奏」(Literarisches Quartett)
 評論家のマルツェル・ライヒ＝ラニツキがホストを務めたZDF(ドイツ第二テレビ)の番組で、2001年12月終了。13年間、この種の番組としては異例の高視聴率を誇った。『そんな日の雨傘に』は2001年8月の放送で取り上げられ、大反響に。

・ビューヒナー賞
 ドイツとドイツ語圏の国において最も権威ある文学賞。賞金は40000ユーロ(約450万円)。主な受賞者()は受賞年
 エーリッヒ・ケストナー(1957)
 パウル・ツェラン(1960)
 ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー(1963)
 ギュンター・グラス(1965)
 ハインリヒ・ベル(1967)
 トーマス・ベルンハルト(1970)
 エリアス・カネッティ(1972)
 ペーター・ハントケ(1973)
 エルフリーデ・イエリネク(1998)

窮地に陥った46歳の男……といっても、いわゆるミドルエイジ・クライシスとはまったく関係ない本作の主人公。作者が投影されている部分も大きいでしょうが、編集担当F(48歳♂)がイメージしていたのは、『失踪日記』の吾妻ひでおだったとか……。



ゲナツィーノの主な作品

- Laslinstrasse (ラスリーン通り), 1965
- Abschaffel-Trilogie (アブシャッフェル三部作) : ①
 Abschaffel, 1977
 Die Vernichtung der Sorgen, 1978
 Falsche Jahre, 1979
- Der Fleck, die Jacke, die Zimmer, der Schmerz (染み・上衣・部屋・痛み), 1989 ②
- Die Obdachlosigkeit der Fische (魚たちのホームレス), 1994 ③
- Ein Regenschirm für diesen Tag (本書), 2001
- Eine Frau, eine Wohnung, ein Roman (女・住みか・小説), 2003 ④
- Die Lieblosigkeit (愛の衰弱), 2005 ⑤
- Mittelmäßiges Heimweh (ミドルレベルのホームシック), 2007 ⑥
- Das Glück in glücksfernen Zeiten (幸とおき時代の幸), 2009 ⑦